

米国1930年代の初等音楽科教科書における読譜指導

— A *Singing School* 双書の分析を通して —

川 口 さやか

(本講座大学院博士課程後期在学)

はじめに

米国公教育における歌唱教授は、1838年のボストン市の公立学校における唱歌科設立から始まった。その後読譜を重視した指導法が広まった¹⁾が、20世紀初頭には、歌唱を歌うことを重視した指導法が提示されるようになる²⁾。荒巻(2001)では、中等学校については、1917年のNational Education Association中等教育改造審議会音楽科委員会報告、初等学校については、1921年のMusic Supervisors' National Conference教育委員会報告において音楽科が成立したことが明らかにされている。

唱歌教科書における読譜指導は、19世紀末には多くがエクササイズ課題(以下課題)³⁾を用いて行われていたが、1900～1910年代になると課題を用いた指導法に加えて、歌曲の一部を用いる指導法を全学年で行う方法が提案されるようになる⁴⁾。19世紀末にも、歌曲の一部を用いる読譜指導は存在する⁵⁾。しかし1900～1910年代は、全学年で歌曲を用いる読譜指導を実施する意向が強い点で19世紀末とは異なっている。また、1920年代の音楽科教科書における課題の取扱いは、教科書にも指導書にも課題を含めないものと、指導書や副教材などに課題を含めているものが見られる。しかし指導法については、歌曲の一部を用いた読譜指導を行うなどの改善が見られるようになった点で共通しており、その背景には、児童中心主義や経験主義の影響が考えられた⁶⁾。

1930年代になると、歌曲を用いた読譜の学習を提唱する、新しい指導法を切り開こうとする動きが見られる。音楽科教育に大きな影響を及ぼしたマーセル(Mursell, J. L.)は、*The Psychology of School Music Teaching*(1931)において、読譜の学習方法(Mastery of the Score)で理想的な最初の方法は、歌曲をとおして学ぶ方法である⁷⁾と記している。なぜなら、楽器演奏をとおして読譜を学ぶことは、声をとおして学ぶこととは異なり、学び手が異なった点に注意を向けてしまう危険性があるからである。したがってマーセルは歌曲を歌うことをとおして読譜を学ぶ方法を推奨している。さらにマーセルは、*Human Values in Music Education*(1934)において、「音楽教師は、既に決められた習慣の連続ではなく、多面的な文化の経験や自己表現や社会的な活動の機会を得ることができるよう常に子どもたちの音楽に目をむけて計画しなければならない。」⁸⁾と述べている。ここでは、音楽を幅広い視点からとらえ、子どもたちの視点に立った教育計画の提示が推奨されている。また、1934年にMusic Teachers' National Associationの議長を務めたゲルケンス(Gehrkens, K. W.)は、*Music in the Grade Schools*⁹⁾(1934)において、「声のトレーニングを行った後に子どもたちが歌唱することが許される従来のような指導法とは異なり、近代的な指導法は美しい歌曲を用いた方法であり、子どもたちが歌曲を歌う際に可能な限り美しく表現豊かに歌うことをトレーニングする方法である。」と提唱している。また、「方法としてのObservation Song」という章では、歌曲をもとに、音階、半音、リズムなどを学ぶ方法を提示している。このように、読譜指導においても歌曲をもとに学ぶ方法が示されている。Observation Songは、歌唱や劇、遊びをとおして慣れ親しんだ既習の歌曲であり、子どもたちが興味をもっている歌曲である。同時に技術的にも学習されたものであるため、新しい学習事項に焦点化しやすい。このような提唱がなされるなかで、1930年代の教科書双書ではどのような読譜指導法がとられたのであろうか。

米国の音楽科教科書や雑誌における史の変遷を扱ったものには、Dominy (1958) や Houchell (1985) などがある。Dominy (1958) は1923年から1950年代の10の音楽科教科書双書における、構成、教材の目的、教材の出典、音楽の質、歌曲の音域について詳細に分析を行っている。また、Houchell (1985) は、*Music Educators Journal* の1914年から1970年に掲載された音楽教育の目標に示された読譜の内容について分析を行っている。しかし読譜の教育課程や指導法については、いずれの研究においても詳細な検討が行われていない。読譜に関する先行研究には、①器楽演奏に関わる読譜指導を扱うもの、②読譜指導の効果について統計的処理にもとづき検証するもの、などが多く史の変遷を扱うものは少ない。筆者は既に、1900年代、1910年代、1920年代、1940年代の教育課程や読譜指導の研究を行ってきた¹⁰⁾。本稿では、1930年代の読譜の教育課程および、読譜指導の検討を行う。

1930年代に出版が始まった代表的な音楽科教科書には、グレン (Glenn, M.) やリービット (Leavitt, H. S.) らの *The World of Music* (Ginn and Co., 1936) およびアーミテージ (Armitage, T.) やダイケマ (Dykema, P. W.) らの *A Singing School* (C. C. Birchard and Co., 1939-1943) 双書¹¹⁾ がある。本稿では、*A Singing School* 双書を対象としてこの双書の読譜の教育課程、および読譜指導を明らかにする。さらにその背景にある思想を明らかにすることを研究の目的とする。

I *A Singing School* の目的と構成

A Singing School の目的は、歌唱をそれ自体が楽しい、基本的なものとして、文化活動のなかで歌唱が行われること、加えて学校における他の教科を活気づけることを促進させること¹²⁾ としている。これはマーセルの主張する、文化的な経験や社会的な活動の機会をもつ音楽教育と同様のものと考えられる。*A Singing School* の読譜学習に関連の深い内容を学年ごとにまとめたものが表1である。

表1から明らかのように、教科書には課題が含まれていないが、指導書には既習曲の一部などの、歌曲に関連した課題が含まれている。学習内容は、楽典的な内容に加えて、リズムと旋律のパターンの学習が多く含まれている。さらに、学習方法は、ステップを用いた学習が比較的新しい方法である¹³⁾。一方で、ドリルを行う、描画を行う、記譜を行う、というような従来の指導法も積極的に採用している。

指導書の目次には、学習項目ごとに節が構成されている。読譜に関する内容は、第2巻では“技術的な学習または読譜 (music reading)”、第3巻では“読譜と記譜”、第4巻では“読譜”、第5巻では“読譜”、第6巻では“読譜”、“半音”、“記譜”で示されている。また、第4学年の“読譜”には、目次において学習内容も併記されており、実際に読譜で学ぶ内容が多く、指導方法も他学年と比較すると詳細である。このため、第4巻 (第4学年) が読譜学習を集中して行う時期に設定されていることが分かる。

幼稚園および第1学年は、読譜の準備段階であり、読譜という言葉は使われていない。しかしさまざまな領域で読譜に関する学習が行われている。この内容をⅡ-1に示す。また、第2学年と第3学年は、旋律パターンが特徴であるため、この内容をⅡ-2とⅡ-3に示す。さらに第4学年は、読譜能力育成のための組織的な学習が特徴であるため、Ⅱ-4にこの内容を含んだ事例を示す。第5学年に関しては、2部合唱の歌唱に即した読譜指導法をⅡ-5に示す。第6学年は、読譜、半音、記譜の指導法をⅡ-6に示す。

表1 A Singing School における読譜の教育課程

| 学年 | 教科書 | 教材の種類 | 学習内容 | 学習方法 |
|--------------------|---------------------------------|---|--|---|
| 幼稚園 および 第1学年 | <i>Our First Music</i> (教師用指導書) | 声楽、器楽に関する教材。 | 音高。リズムパターン。 | 聴覚を通してのみ学ぶ。 “呼びかけ”を通して、音高の学習を行う。 走る、歩く、の動きと結び付けて音価を学ぶ。 |
| 第2学年 | <i>Our Songs</i> | 暗唱、視唱のための歌曲。 | フレーズの構造。 旋律パターン。(ソミ、ソラソ、ソファミレド、など) 主音。音階。 | 暗唱で学んだ歌を、教科書でも親しんだ上で、読譜の学習が提示される。 和音を構成する音を用いたり、さまざまな音型をつなげたりする。 |
| 第3学年 | <i>Merry Music</i> | 暗唱、視唱のための歌曲。 | 階名。 親しんだ音型。(復習) | より充実した暗唱や視唱 (note) の学習。 オリジナルの曲を記譜する。 (ほぼ教師が行い、子どもが少し手伝う。) ステップを踏む。* 階名は、独立した記号ではなく、音楽的な語彙やフレーズと関連のあるものとして、教えられる。 |
| 第4学年 | <i>We Sing</i> | 第2、第3学年で学んだ内容(復習)。 指導書の課題(既習曲から抽出された音型を含む)。キヤッチ、ディスカント、ラウンド。 | 分割されていない拍、均等に分割された拍、6/8拍子。 主音。音名。和音。短調。半音。4分音符、8分音符、付点4分音符。ダルセーニョ、ダ・カーポ、フィーネ。コード。♪。♩。 | 暗唱や模唱を含む歌曲の学習に加えて、読譜能力育成のための組織的な学習を行う。 課題を用いてドリルを行う。どのように和音が形成されるのか、歌唱のなかで和音をどのように用いるのかを学ぶ。リズム・スティック、ウッド・ブロック、ドラム、ゴング、またはトライアングルでリズムを演奏することで、音符の学習を行う。 |
| 第5学年 | <i>Our Land of Song</i> | 斉唱と2部合唱の歌曲。斉唱と2声部が含まれる歌曲。カノン、ディスカント、ラウンド。 | 音価。和音。音階。拍子。音程。 | 斉唱と2声部が含まれる歌曲に即して、読譜の学習を行う。 ステップを踏むことで音価の学習を行う。(2分音符=ステップ、膝を曲げる、4分音符=歩く)。* |
| 第6学年 | <i>Music Everywhere</i> | 斉唱と2部、3部合唱の歌曲。斉唱と2声部が含まれる歌曲。カノン、ラウンド。 | シンコペーション、半音、構造。2連符、3連符。音階、和音。 | 歌曲の構造の分析を行う。 指導書に示された課題などを用いてドリルを行う。 動機付けられた記譜の学習を行い、学習内容を確立する。 |

(Armitage, T. et al., *Our First Music*, 1941, *Our Songs Teacher's Manual*, 1940, *Merry Music Teacher's Manual*, 1940, *We Sing Teacher's Manual*, 1942, *Our Land of Song Teacher's Manual*, 1944, *Music Everywhere Teacher's Manual*, 1945, C. C. Birchard and Co. より作成) 幼稚園および第1学年以外の教科書は、すべて子ども用である。 は比較的新しい内容を示している。下線は、従来に見られる学習方法を示している。*は、ダルクロウスのユーリズミックスの影響が認められる箇所を示している¹⁴⁾。

II A Singing School における学年ごとの読譜指導

II-1 幼稚園および第1学年

幼稚園および第1学年用の教師用指導書 *Our First Music* は、24のユニットから構成されており、それぞれ“夏の経験を分かちあう”→“家”→“秋”→“私たちの町”→“健康と安全”・・・というような順序で主題が設定されている。この主題は、子どもの生活に密接に関わる内容である。ここには児童中心主義の影響が考えられる。また、それぞれの主題はおおよそ I. 教育方針を案内する、II. 音楽的な応用、III. “呼びかけ (calls)” とモチーフ、IV. 歌曲、V. リズム演奏と劇化、VI. 聴取する教材、VII. リズムバンドの計7つの学習から構成されている。

表2 *Our First Music* における読譜の準備学習例

| ユニット | 歌唱領域 | リズム領域 | 創作領域 | 器楽領域 |
|-------------------------------|---|--|--|--|
| 1 夏の経験を分かち合う 音高 (pp.1,4) | “呼びかけ” 蜂、鳩、猫の鳴き声 で模倣する。(1度、 3度、音階のような、 和音のような、4度、 8度などの音程で。) | | “呼びかけ”の応用 として、教師が「今 朝、何を見ました か？」と歌う。子ど もたちが旋律を創作 して答える。 | |
| 4 私たちの町 リズム (p.49) | | 4分音符と8分音符 から構成されるリズ ムパターンを、子ど もたちが歩く、走る、 などして表す。 (すべて2/4拍子) | | |
| 14 クリスマス (p.222) 打楽器の演奏 | | | 親しんだ歌曲に、ベ ルやリズムスティッ ク、タンブリンの演 奏を創作して加え る。 | ベル、トライアングル、リ ズムスティック、ウッドブ ロック、タンブリン、ドラ ムの演奏とピアノの伴奏 を合わせてくおもちゃの 行進を演奏する。 |

(Armitage, T. et al., *Our First Music*, C. C. Birchard and Co., 1941, p.1, p.4, p.49, p.222 より作成)

表2のように、歌唱、リズム、創作、器楽の領域で、音高やリズムの学習、器楽演奏などをおして、読譜の準備学習が行われている。特に旋律とリズムの学習が顕著に現れているものは、歌唱とリズムの領域である。表2の他に、聴取領域では、<椿姫>から二重唱 (p.49) や、モーツァルトのソナタ (p.35)、グリーグのワルツ (p.35)、ルソーの<子守歌>(むすんでひらいて) (p.172) などが挙げられているが、多くは静聴 (quiet listening) や雰囲気を楽しむことを第1の目的としている。そのため、モチーフやテーマに着目する、といった楽曲の構造を理解する学習が主要な目的とはなっていない。聴取の指導法に関しては、急がずに、子どもの自立と真の子どもの感受 (taste) を育成する。記述¹⁹⁾が見られる。ここでは児童の発達段階に即した教授の必要性を説いており、児童研究運動の影響が認められる。

Ⅲ. “呼びかけ”とモチーフの学習が連続して24のユニットで行われる計画が従来と比較すると新しい。“呼びかけ”では、声質の学習も音高やモチーフの学習も行うことになる。その方法は1920年代に見られた、ニュートラル・シラブル (ルー、ラー唱) や犬の鳴き声や鐘の音からさらに発展し、“サーカスの呼びかけ” “教師から子どもへの呼びかけ (今朝何を見ましたか?)” に子どもが旋律と歌詞を創作して応えるもの、というように、子どもの視点や経験に沿った内容へと発展している。

Ⅱ-2 第2学年

第2学年用教科書*Our Songs*は、その目的を「子どもたちが音楽をより身近なものとしてとらえ、生活における興味や喜びと関連させて感じ取り、彼ら自身の望む表現へと導くこと」¹⁶⁾としている。ここにも生活経験とのかかわりや、子どもの視点に立った教育の必要性がうかがえ、経験主義や児童中心主義の影響が考えられる。

第2学年では、歌曲に含まれている音型を用いて耳のトレーニングや読譜学習を行う。*Our Songs*の旋律パターン例を示したものが表3である。

表3 読譜（耳のトレーニング、学習）に用いられるパターン例

| 番号 | 旋律のパターン | 学習内容 | 番号 | 旋律のパターン | 学習内容 |
|----|-----------|-------------|----|---------------|------------|
| 1 | ソラソ (ミ) | 刺繍音 | 9 | ドソミド (下行) | アルペッジョ (I) |
| 2 | ソミ | 3度 | 10 | ミソ | 3度 |
| 3 | ミド | 3度 | 11 | ドミソ | 和音 (I) |
| 4 | ドシラソ | 音階 (テトラコード) | 12 | ドミソド (上行) | アルペッジョ (I) |
| 5 | (ソ) ファミレド | 音階 (テトラコード) | 13 | レシド | |
| 6 | ドレミファ | 音階 (テトラコード) | 14 | レド | 2度 |
| 7 | ソラシド | 音階 (テトラコード) | 15 | (ソ) ファレド | |
| 8 | ソミド | 和音 (I) | 16 | 短調、ペンタトニック、旋法 | |

(Armitage, T. et al., *Our Songs*, C. C. Birchard and Co., 1939, p. 173より作成) 示した内容は、第3学年でも継続して学ばれる内容を示している。ローマ数字は、和音を示している。以下同様に用いる。

表3では16種の音型が含まれている。音型の示した内容は、第3学年でも継続して学ばれる内容であり、第3学年の比較的早い頁で復習される。また、同じ音型が頁にまよって現れるのではなく、何度も繰り返して現れる構成となっている。リズムには、平易なリズムと複雑なリズムが含まれており、平易なリズムが複雑なリズムよりも若干多く現れるが、複雑なリズムも積極的に用いられている。このことから、第2学年では旋律パターンの多様性もさることながら、易しいものと難しいものとを組み合わせ、連続的に学ぶ工夫が行われていることが分かる。より複雑なリズムに含まれる6/8拍子の内容は、後に第4学年の学習で深められる。ここでは子どもたちの音楽的な経験に配慮されている。

II-3 第3学年

第3学年用教科書 *Merry Music* では「*Our Songs* (第2学年用教科書)と同様に、読むための素材を多数含めているが、時期尚早に行われてはならない。」¹⁷⁾と記されている。また「音楽とともにある楽しい経験の結果として、興味にもとづき、音楽の読み書きといった技術的な側面を扱う能力が育成される。」¹⁸⁾と記されており、やはり子どもの興味や関心や経験が重視されている。*Merry Music*の旋律パターン例を示したものが表4である。

表4 読譜に用いられるパターン例

| 番号 | 旋律のパターン | 学習内容 | 番号 | 旋律のパターン | 学習内容 |
|----|------------------|------------|----|--------------------------|----------------------|
| 1 | 音階、平易な跳躍 | | 15 | ラミ (下行) とラミ (上行) | 4度と5度 |
| 2 | 主和音 | | 16 | ラレ (上行)、ラレ (下行) とレラ (下行) | 4度と5度 |
| 3 | ペンタトニック | | 17 | レソ (上行) とレソ (下行) | 4度と5度 |
| 4 | 短調 | | 18 | ソレ (上行) とソレ (下行) | 4度と5度 |
| 5 | ソミド | 和音 (I) | 19 | ソファ (上行) | 7度 |
| 6 | ドソミド (下行) | アルペッジョ (I) | 20 | ラファレとレファラ | 和音 (II) |
| 7 | ドミソ | 和音 (I) | 21 | ファレシとシレファ | 和音 (VII) |
| 8 | ドミソド | アルペッジョ (I) | 22 | ミドラとラドミ | 和音 (VI) |
| 9 | ラドとドラ | 3度 | 23 | レシソ | 和音 (V) |
| 10 | ファラとラファ | 3度 | 24 | ドラファとファラド | 和音 (IV) |
| 11 | レファとファレ | 3度 | 25 | ソシレファ | 和音 (V ₇) |
| 12 | シレとレシ | 3度 | 26 | ラドファラ (上行) | アルペッジョ (IV) |
| 13 | シソ | 3度 | 27 | ラファレシ (ド) (下行) | |
| 14 | ミラ (下行) とミラ (上行) | 4度と5度 | 28 | 連続 | |

(Armitage, T. et al., *Merry Music*, C. C. Birchard and Co., 1939, p.173より作成) 示した内容は、第2学年から継続して学ばれる内容を示している。

表4では28種の音型が含まれている。第2学年では、1度の和音や2度、3度、テトラコード、刺繍音といった内容が多くを占めたが、第3学年では、さらに発展して、和音の種類が拡大し、音程も、4度、5度を中心に、7度まで拡大する。リズムに関しても、その他のリズムが含まれ、より難しい内容が含まれている。旋律パターンは、第2学年と同様のものが占める割合は少なく、新出パターンがかなり多く含まれており、子どもたちの音楽的経験の拡大に配慮されている。

読譜指導では、「pp.117-144で学ばれた旋律パターンの学習をもとに、多くの歌曲が学ばなければならない。」¹⁹⁾として、ある歌曲を用いて読譜学習を行い、そこで学んだ内容を他の歌曲に適応させる学習を数多く行う、という比較的新しい方法を採用している。一方で「オリジナルの歌曲を記譜する学習は、概念学習のために有効である。」²⁰⁾と記しており、従来から行われている記譜の学習も重視し、学習内容の定着に配慮している。

II-4 第4学年

表5 <朝の祈り>と<キャンプでの夜>を用いた読譜学習の例

| 段階 | 活動 | 教師 | 子ども |
|----|-------------------------------------|---|---|
| 1 | 予備 楽典(主音)の学習 歌唱、楽典の学習 | ○主音が第2間にある、2つの歌曲<朝の祈り>と<キャンプでの夜>(p.20)を提示する。 ○新しく学ぶ調に移調された、親しんだ歌曲を読む学習を予備学習として行う。 ○黒板または大きな用紙に、(移調された)既習曲<ヤッホー>と<古いクリスマスの歌>を提示する。 | ○子どもたちは、歌詞、もしくは主音の位置(×で示されている)を指示して主音、または1について尋ねる。 ○歌うことによって、記譜法を観察し、新しい発見をする。 (移調されていることに気づく。) |
| 2 | 歌唱 記譜 | | ○新しい調で歌う。もしくはこれらの2つの歌曲にもとづいて作られた(指導書に示された)20の課題を歌う。 ○1、3、5、15、20番の課題を記譜する。(これらは歌曲の一部分と酷似している課題であるため、子どもたち全員に記譜されるべきである。)(黒板の内容を小さな用紙に写譜する。線と線の間が、大きなものを用いる。) |
| 3 | 歌唱(表現) | ○歌曲の精神(spirit)を心に留める支援を十分に行う。 | ○歌詞を読んだ後に、<朝の祈り>を歌う。音符が示しているように、階名にも持続を与えながら歌う。 |
| 4 | 視唱の予備 | ○<朝の祈り>を完全なものにするために、6課題を用いて学習するように導く。(もしも教師が最良と考えるのであれば、4段階を5段階と置き換える。) | ○(課題を用いて学習する。) |
| 5 | 視唱 | | ○歌詞、数字、階名を用いて、1人で歌う。 |
| 6 | 歌唱(表現) 分担唱 | ○1から5までの過程が首尾よく行われた後に、<キャンプでの夜>を歌うように導く。 ○歌曲の精神を心に留める支援を行う。 ○最初は、教師と子どもで分担唱を行う。その後、リーダー的な子どもと教師で先行する小節を歌う。 | ○リーダー的な子どもは、1、2、3、4、9、10、13、14、小節を教師とともに歌う。すべての子どもは、残りの小節を歌う。 |
| 7 | 楽典(形式)の学習 歌唱 | ○形式の学習の後に、クラスは教師の支援なしに歌曲を歌えるように導く。 | ○形式の学習の後に、歌曲を歌う。 AA'BC |

(Armitage, T. et al., *We Sing Teacher's Manual*, C. C. Birchard and Co., 1942, pp. 15-17より作成) 下線は従来に見られる学習方法を示し、 は、比較的新しい学習方法を示す。

表1で示したとおり、*A Singing School* 双書では、特に第4学年で組織的な読譜の学習を行う計画がなされている。第2、第3学年の復習の後、新しい歌曲が学ばれる。その際、指導書の課題を用いて、ドリルを行うことが明示されている。この課題は、既習の歌曲から抽出された音型も含んでいる。第4学年では、例として27課題が示されている。この課題の名称はStudyであるが、内容はエクササイズである。教科書 p. 20の歌曲を用いて読譜指導を行う場合の手順をまとめたものが表5である。

表5の下線で示したように、課題は1つひとつ分割して提示するのではなく、まとめて提示している。「これらの課題は、子どもたちが教室のどこからでもよく読めるように、黒板もしくは分けて十分に大きい音符で厚紙に書かれるべきである。それらは歌詞、ニュートラル・シラブル（ルー・ラー唱）、数字でも歌われる。」²²⁾ の記述に見られるように、さまざまな方法で反復学習されることが意図されており、1920年代の歌曲を用いた読譜の学習方法の特徴を受け継いでいる。

また、表5第1段階で「既習曲を移調した楽譜を示し、子どもたちは歌うことによって、移調されていることに気づく。」²³⁾ ことは、子どもたちが自ら学ぶことを重視していることの現れである。さらに課題の扱いについては「それぞれの子どもが、歌いたいと思う課題を選ぶことを許可する。」²³⁾ という記述のように、子どもの興味を失わずに学習することが優先されている。さらに「子どもたちが興味を失うと直ぐに、この基本練習は中断されるべきである、もしくは日を改めるまで、延期されるべきである。」²⁴⁾ とも記されており、子どもの視点に立った考えであると言える。これらには児童中心主義の影響が考えられる。

一方で、表5第5段階では「歌詞、数字、階名を用いて、1人で歌う。」という記述が見られるように、技術的な学習内容の定着にも配慮している。課題の内容は、主和音、隣接音、3度、5度、音階などさまざまな内容を含むものである。課題も複数用いるが、新曲も複数用いる計画であり、なおかつ既習曲との関連も含める、というように多くの音楽経験が重視されている。ここには、経験主義が影響を及ぼしていると考えられる。最終的に第7段階で形式が学ばれるが、その前には歌曲の精神（spirit）を心に留めることが強調されている。このように音楽的な学習にも配慮されている。

II-5 第5学年

第5学年は、表1で示したとおり、2部合唱の歌曲の歌唱に即して読譜学習を進める。この学習方法は、第6学年でも採用される。2部合唱の導入は、既に第4学年において、ディスカントとラウンドを用いて行われている。

2部合唱の歌曲の歌唱に即した読譜学習において重視されていることは、音の響きを確かめながら学ぶことである。「多くの学校で、合唱を行う際に音符を読んで進める代わりに暗唱で教えるという、逆転が起こっている。」²⁵⁾ と指摘されている。また「やる気をそぐエクササイズよりも、2部合唱を歌うべきである。」「斉唱の歌曲を視唱する際、用いられる歌曲は子どもの興味に沿うべきである。」²⁶⁾ と読譜の節で言及されていることから、歌唱に即した読譜指導が推奨されている。

新たな提案として、斉唱の部分と2声部に分かれる部分を含めた歌曲の学習を十分にいき、2部合唱の歌曲の読譜を行う動機付けをすることが記されている。このような機会が与えられることが少ないことも指導書中で批判されている²⁷⁾。ここでは、2声部に分かれる部分を分けて歌った後に合唱するのではなく、同時に2声で歌って学習する必要性が強調されている。以上のことから、適切な歌唱教材を用いて適切に学習することをとおして、2声部に分かれた時点で、他のパートを聞いて混乱が起きないことを導くことが推奨されている。ここでは読譜→2部合唱→2声合唱時の、自らのパートの独立した歌唱技能の習得、という順序を採用しており、最終的には読譜の能力が歌唱に応用されることが目指されている。

さらに2声部歌唱に即した読譜学習において重要な事は、少なくともよく用いられる音程に対する意識（consciousness）であり、子どもたちは、長3度、短3度、完全4度、完全5度、長6度、短6度、長7度、短7度、長2度、短2度の名称と音の響き（Sounds）が、歌曲で示された順番で教えられるべきである²⁸⁾

と記されている。最初子どもたちは、一般的な名称（度数）を知ることのみが必要とされる。後に特定する名称（長、短、完全）が教えられであろうと記され、長音階でこれらの音程が現れる例が示されている。（例 長3度：1-3、4-6、5-7、短3度：2-4、3-5、6-8、7-2、など。数字は1がド、2がレ…、7がシを示している。以下数字を階名に当てはめて同様に用いる。）

II-6 第6学年

第6学年では、読譜指導の内容は、読譜、半音、記譜の項目に詳細に記されている。

読譜の項目では、以下の典型的なパターンが学ばれる。Iまたはトニックの和音（1、3、5、8）、Vまたはドミナントの和音（5、7、2、5）、V₇またはドミナントセブンスの和音（5、7、2、4）、V₉またはドミナントナインスの和音（5、7、2、4、6）の和音、IVまたはサブドミナントの和音（4、6、8、4）、VIまたはサブメディアントの和音（6、8、3、6）、II₇またはスーパーニックセブンスの和音（2、4、6、8）とともに、IIまたはスーパーニックの和音（2、4、6、2）を、どのような調でも学習する。3、またはより多くの音を一目見ただけで把握することが重要であるとしている。このような、複数の音を把握することを推奨しているのは、1920年代の学習方法の継承であると考えられる²⁹⁾。また、ある音から次の音へと苦勞して読む代わりに、数音をまとめて読む方法を推奨し、この体系的な学習のために、言語学習で用いるフラッシュ・カード³⁰⁾を用いることを提案している。さらにこのカードを子どもたち自身が作成することがすばらしいプロジェクトであるとしている。これは、従来の訓練的な学習ではなく、児童の視点に立った学習方法の提案である。

半音の学習は、第4学年および第5学年でも学習している。これらの学習基盤をもとに、教師は子どもたちに、「なぜ、#3と#7、b4とb8がありませんか。」と尋ね、そしてその後全音と半音について話し合う時間をもつ。鍵盤図を用いて半音を歌うが、もし歌うことができないのであれば、ゆっくりとした動きの〈夜の女王〉のような歌曲と関連づけて、学習することが提案される。また、実際にピアノの音の響きで音程を確認することも提案されている。このように、実際の音の響きを確認しながら読譜学習を行うことが重視されている。ここでは、形式的な学習ではなく、子どもたちが音を感じ取ることを重視する意向が現れている。

記譜の学習では、フランシス・ベーコンの「読むことは人を豊かにし、書くことは人を確かにする。」の言葉が引用され、第6学年はより確かな学びが目ざされている。一方で、従来のような、動機付けのないドリルではなく、子どもたちの目線に立って、記譜の学習が行われるべきであるとして、「声楽用の楽譜が、あまりに低すぎる、高すぎる場合は、クラリネットやホルネットなどの移調楽器に声楽パートを移調して記譜する。」「特別なプログラム（ラジオ放送のプログラムと関連したもの。）で流れたテーマのなかで子どもたちの好きなテーマを記譜させる。」ことなどを提案している³¹⁾。

上述した学習方法では、従来強調されていた反復学習が行われる一方で、子どもたちの音楽的な経験に配慮している。また、第5学年までに学んできた音階や和音の学習がより深く理論的に学ばれている。このことから、他の学年との関係を深めることで、系統性に配慮していることが分かる。

III A Singing School における読譜指導の特色

以上のように、A Singing School 双書は、歌曲の歌唱に即した読譜学習方法を打ち出している。このため、歌曲の歌唱と読譜学習とは密接な関係が見られる。また、ステップを踏んでリズムのトレーニングを行う、リズムパターンを学ぶ、というようなリズムに関する学習も多い。しかし聴取や創造的な学習や器楽領域との関連については、あまり言及されていない。このため、A Singing School 双書は、歌唱領域を中心として読譜学習を行う計画がなされていると考えられる。

1930年代以前の教科書からA Singing School 双書への変遷における読譜指導の変化の内容をまとめたものが表6である。

表 6 1930年代以前の教科書から *A Singing School* への変遷における読譜指導法の変化

| 番号 | 1930年代以前までの学習方法 (教科書名) | <i>A Singing School</i> における学習方法 (特徴的な学年) | 新旧 | 重視された点 |
|----|--|---|-----------------------|---------------|
| 1 | ○楽譜上に×などを記して主音の位置を確認する。(McLaughlin, J. M., Hamblin, B. H., Brick, H. A., <i>New School Music Primer</i> , Ginn and Co., 1913、Damrosch, W., Gartlan, G. H. & Gehrkens, K. W., <i>Universal School Music Series Primer</i> , Hinds, Hayden & Eldredge, Inc., 1923) (低学年) | ○楽譜上に×で主音を示した教材を示し、移調されていることに気づく。(第4学年) | 従来と同様の方法であるが、用いる学年が変化 | 主体性 |
| 2 | ○歌曲の一部を用いて読譜学習を行う。(Smith, E., <i>The Modern Music Series</i> , Silver Burdett and Co., 1901、Parker, H., McConathy, O., Birge, E. B. & Miessner, W. O., <i>The Progressive Music Series</i> , Silver, Burdett and Co., 1914-1915 など) (全学年) | ○歌曲の一部を用いて読譜学習を行う。(全学年を通して) ・旋律パターンが拡大。 ・学年を超えて連続的に旋律やリズムのパターンを学ぶ。 ・易しいものと難しいものとを組み合わせで提示。 ・ <u>読譜学習とあわせて、歌曲の生まれた社会的背景や、詩に親しむことを提案する。</u> ・ <u>既習曲、新曲、複数の課題を同時に提示した学習。</u> | 従来の方法に改善を加えたもの | 他教科との関連 |
| 3 | ○歌曲の一部を用いて読譜学習を行う。 ・ニュートラル・シラブル唱(ルー・ラー唱)、歌詞で歌う。(Foresman, R., <i>Manual for First Grade Music</i> , American Book Co., 1931 など。) (低学年) | ○歌曲の一部を用いて読譜学習を行う。 音名、ニュートラル・シラブル、数字を用いて歌う。(第6学年) | 従来の方法に改善を加えたもの | 歌唱と読譜学習の関連 |
| 4 | ○ステップを踏むことで音価やリズムの学習を行う。(Fullerton, C. A., <i>A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools</i> , Fullerton and Gray, 1925) (第3、4、5、6学年) | ○ステップを踏むことで音価やリズムの学習を行う。(第4学年) | 比較的新しい方法 | リズムのトレーニング |
| 5 | ○教科書において、教科書編纂者から子どもたちへの手紙の頁を設け、その頁を読むことで読譜の重要性を理解し、子どもの学習意欲を高める。(Damrosch, W., Gartlan, G. H. & Gehrkens, K. W., <i>The Universal School Music Series Primer</i> , Hinds, Hayden & Eldredge, Inc., 1923) (第2学年) | ○教科書において、“ <u>Tuneful ティム</u> ”を設定して、子どもたちに読譜の助言を示す。また、ティムの役を子どもが演じることにより、子どもたちの学習意欲を高める。(第4学年) | 比較的新しい方法 | 主体性 |
| 6 | ○旋律ドリルカードやリズムドリルカードを用いた学習を行う。(Damrosch, W., Gartlan, G. H. & Gehrkens, K. W., <i>The Universal School Music Series</i> , Hinds, Hayden & Eldredge, Inc., 1923) (第3、4、5、6学年) | ○言語学習で用いるような、フラッシュ・カードを用いて旋律やリズムの学習を行う。 <u>子どもたち自らフラッシュ・カードを作成する。</u> (第6学年) | 比較的新しい方法 | 主体性 |
| 7 | ○歌曲の一部を用いて読譜学習を行う。 ・斉唱時の学習について言及される場合が多い。和音の課題を用いた学習が伴われる。(Giddings, T. P., Earhart, W., Baldwin, R. & Newton, E. W., <i>The Teachers' Book</i> , Ginn and Co., 1925) (第6学年) | ○歌曲の一部を用いて読譜学習を行う。 ・ <u>斉唱部分と2声に分かれる部分との両方を含む教材を用いて、音の響きを確かめながら学習する。合わせて音程の学習を行う。</u> (第5学年) | 新しい方法 | 音楽技能と読譜スキルの育成 |
| 8 | | ○ <u>動機付けられた記譜の学習を行う。</u> (第6学年) | 新しい方法 | 主体性 |

は、子どもの主体性に配慮されている内容を、下線は新しい内容を示している。

表6の で示したように、変化している箇所は、子どもの主体性に配慮して改善されたものが多く、直接的に読譜に関わる内容というよりは、間接的に読譜学習に関わるものが多い。(番号2、5、6、8)。子どもの興味や関心に配慮しており、ここには児童中心主義の影響が考えられる。また、番号1、3、4は、従来の方法を継承した方法である。番号2、7の下線で示した部分が特に新しい方法を打ち出してい

内容である。ここでは歌曲の歌唱を通した読譜学習について改善を行っていることが特徴である。歌曲教材の開発、既習事項と新曲との関連、記譜法上の音と実際に鳴り響く音に着目されており、子どもたちの音楽的な経験の拡大に配慮されている。

おわりに

以上のように、1930年代の米国音楽教科書より、*A Singing School* 双書における読譜指導を分析した。従来からの記譜の学習や反復学習を引き続き採用しながらも、ダルクローズの影響などを受けたより子どもの主体性と音楽的な経験を重視した読譜指導が計画され、従来と比較すると特に歌曲の歌唱に即した読譜学習に新たな改善が見られることが明らかになった。今後は同年代の教科書双書を検討し、この時代の特徴を明らかにしていきたい。

註、および引用文献

- 1) Birge, E. B., *History of Public School Music in the United States*, MENC, 1966, pp.113-143
- 2) Gehrrens, K. W., "The Evolution of Public School Music in the United States", *Music Supervisors' Journal*, 1924, Vol. X, No.3, p.12
- 3) ここでは、歌詞の付されていない歌曲のことをエクササイズ課題とする。しかし歌詞が付されていない場合でも、子守歌や民謡は歌曲とする。
- 4) 例えば、Smith, E., *The Modern Music Series*, Silver, Burdett & Co., 1901やParker, H., McConathy, O., Birge, E. B. & Miessner, W. O., *The Progressive Music Series*, Silver, Burdett & Co., 1914-1915などである。
- 5) 例えば、Mason, L. W.は、*The National Music Teacher*, Ginn Brothers, 1872, p.14の予備練習で暗唱して歌いながら1度、2度、3度、4度の音高の学習を行い、フレーズの学習へと進める方法を提示している。また、マザーグースの<3匹の盲目ネズミ>の旋律を用いて、指で音符を指し示しながら歌う方法を提示している。しかし全体的には課題や問答法を用いる指導方法が多い。
- 6) 川口さやか「米国1920年代の初等音楽科教科書における読譜指導の教育課程－1900～1910年代の唱歌教科書との比較を通して－」『音楽教育史研究』第10号、pp.25-37
- 7) Mursell, J. L., Glenn, M. (1931), p.206
- 8) Mursell, J. L. (1934), p.15
- 9) この書は、*The World of Music* (1936)においても指導書において価値ある音楽教育書として紹介されている。およそ2年ごとに版が重ねられ、1947年には11版が出版されていることから、多くの教師に影響を及ぼしたと考えられる。また、ミネソタ州教育局／真篠将訳『音楽教育の実践計画』音楽之友社、1952においても参考図書として推薦されている。
- 10) 川口さやか「米国の20世紀初頭における唱歌教科書の教育課程に関する研究－19世紀後期の唱歌教科書との比較を視点として－」日本音楽教育学会2006年度第2回中国地区例会、口頭発表、および川口さやか「米国1940年代の初等音楽科教科書における読譜の教育課程－1920年代との比較を通して－」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第二部（文化教育開発関連領域）第56巻、2007、pp.353-362
- 11) 編集は、アーミテージ、ダイケマ、Pitcher, G.、編集顧問は、Farnsworth, C. H.、Smith, H. F.、ラジョ編集はDunham, F.、アート編集は、Setchell, M. P.などが担当している。*A Singing School* 双書は、州の教育課程においても*The World of Music* 双書とともに使用を促される記述が見られる教科書双書である。
- 12) Armitage, T. et al., *Our Songs Teacher's Manual*, C. C. Birchard Co., 1940, p.1
- 13) フラートン (Fullerton, C. A.) は、*A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*, Fullerton and Gray, 1925において既にステップを踏んで音価の学習やリズムのトレーニングを行う方法を用いた体系的な教育課程を示している。Stover (2003) はフラートンが、1917年には既にダルクローズの指導法を取り入れた授業を展開していると述べている。

- 14) Armitage, T. et al., *Our Land of Song Teacher's Manual*, C. C. Birchard Co., 1944, p.20では、ステップを踏むことは、ダルクローズのユーリズミックスから影響を受けていることが明示されている。
- 15) Armitage, T. et al., *Our First Music*, C. C. Birchard and Co., 1941, p.15
- 16) Armitage, T. et al., *Our Songs Teacher's Manual*, C. C. Birchard and Co., 1940, p.1
- 17) Armitage, T. et al., *Merry Music Teacher's Manual*, C. C. Birchard Co., 1940, p.1
- 18) *ibid.*
- 19) *ibid.*, p.22
- 20) *ibid.*
- 21) Armitage, T. et al., *We Sing Teacher's Manual*, C. C. Birchard Co., 1942, pp.13-14
- 22) *ibid.*, p.16
- 23) *ibid.*, p.14
- 24) *ibid.*
- 25) Armitage, T. et al., *Our Land of Song Teacher's Manual*, C. C. Birchard Co., 1944, p.16
- 26) *ibid.*, p.16, p.17
- 27) *ibid.*, p.16
- 28) *ibid.*, p.19
- 29) 例えば、*The Music Hour Series Elementary Teacher's Book*, Silver, Burdett and Co. 1929, p.44では、1音ごとの学習は避けるべきであるとして、音型の学習を数多く提案していた。
- 30) フラッシュ・カードを用いた学習方法は、マーセル&グレン (1931) やゲルケンス (1934) で既に言及されている。
- 31) Armitage, T. et al., *Music Everywhere Teacher's Manual*, C. C. Birchard and Co., 1945, p.34

参考文献

- 荒巻治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房、2001
- Dominy, E. E., "Music Textbooks in Elementary Education: The Appropriateness of Current Textbook Material in Elementary School Music in Relation to the Aims and Purposes of Modern Elementary Education" *Educat. D. dissertation*, New York University, 1958
- Gehrken, K. W., *Music in the Grade Schools*, 1934
- Houchell, R. F., "A Study of Creativity and Music Reading as Objectives of Music Education as Contained in Statements in the "Music Educators Journal" From 1914-1970", *Ph. D. dissertation*, Indiana University, 1985
- Mursell, J. L., Glenn, M., *The Psychology of School Music Teaching*, Silver, Burdett and Co., 1931
- Mursell, J. L., *Human Values in Music Education*, Silver, Burdett and Co., 1934
- マーセル, J. L./美田節子訳『音楽教育と人間形成』音楽之友社、1969
- マーセル, J. L., グレーン, M./供田武嘉津訳『音楽教育心理学』音楽之友社、1965 (1976)
- Stover, P. J., "Teacher Preparation, Methods and Materials for Music Education in Rural and One-Room Schools in Selected Areas of the Midwest (1890-1950)", *Ph. D. dissertation*, Indiana University, 2003